高橋誠一著：
『日本古代都市研究』
古今書院　1994年10月
A５判　410頁　12,360円

現在においては日本の古代歴史地理研究も考古学の成果なくしては語れないといっても過言ではない。その意味では考古地理学的研究法の重要性が高まっているといえるが，著者はおもに故藤岡謙二郎教授の指導のもとで先史・古代歴史地理および考古地理研究に導かれたこともあり，本書は主として考古地理学的視点によって一貫しているという点で，現在の古代歴史地理研究の一断面を如実に示している。

日本の古代都市がどのような特色をもっているのかを究明しようとすれば，日本の事例だけに目を向けていてはその真の特質を見落しかねないことは言を俟たない。したがって，できるだけ視野を広く，少なくとも日本周辺の東アジアぐらいは視座に収めて，また時代的にも狭く古代に限定せずに多少は前後に広げて検討することが求められるのであろうが，これまでは古代史や東洋史の専門家がそれぞれの狭い専門の枠にとらわれすぎるきらいがあった。その点，本書では都市以前の集落にも目を配りながら，古代都市を柔軟に捉えて，特に考古地理的視点から実に多様な側面に注目しながら古代都市に迫っている。

また，視点をかえてみると，本書は弥生時代の集落立地から国府や古代交通路，さらには都城について論じる等，古代歴史地理の主要な研究テーマを扱った論文集であるともいえる。その幅広さもさることながら柔軟な思考でこれら多様なテーマにアプローチしていることが大きな特色であり，幅広い視点から古代都市を眺め，その地域性を明らかにしようという意欲がさりげなく行間からにじみでている。

具体的な構成・内容についてみると，本書は６章からなり，内容的に日本の先史・古代の集落や都市に関する部分と視野を広げて東アジアの都城について論じた部分とに大きく二つに分けられる。章構成は以下のようになっている。

第１章：弥生時代の集落立地
第２章：古代手工業の歴史地理学的考察
第３章：古代山城の歴史地理
第４章：古代西海道の歴史地理
第５章：国府と方格地割
第６章：東アジアの都市と城壁

第１章は，古代都市以前の弥生時代の集落を立地の変化に注目して考察したものである。大阪府域を対象地域として，弥生時代第Ⅲ様式と第Ⅴ様式の時期に集落立地に画期があり，それは鉄器生産や農業技術の進歩などによる生産力の上昇により集落が激増し，この時代の集落立地上の特色である高地性集落は，卑弥呼没後の「倭国大いに乱る」といわれるような社会的動乱や気候変動など多様な要因により出現したとする。ここでは個別の遺跡を問題にするのではなく，対象地域全体における時期別の遺跡を総観的にとらえている点に特色がある。これに加えて，事例的にでも個別遺跡についての具体的な発掘成果に基づいて遺跡の機能等についても触れるところがあれば，より一層理解しやすく，説得力に富むものとなったと思われる。

第２章では視点をかえて，都市形成とも関わって手工業を俎上にのせ，古代の手工業のなかから窯業とその担い手である工人集団の居住地との関係を考察するとともに，生産地と需要地の地理的関係にも踏込もうとした。ついで，これを実証的に明らかにするために，熱ルミネッセンス法とＸ線回析法という先端的分析手法を駆使して須恵器の産地分析を試み，大阪南部窯跡群と奈良県の各遺跡の試料分析結果が両者の類似性を示すことから，大阪南部からの供給があったことを明らかにしている。現在ではごく一般化したことであるが，20年以上も前に理化学的方法を導入して客観的データを示した点は大いに評価されてよいであろう。また，考古地理的研究の大半は遺構に関する考古学的調査の成果によっているが，本章では遺物を資料としているという点でも刺激的である。

つぎの第３章では，朝鮮式山城と神籠石遺跡を一括して古代山城として捉え，その配置と意義について考察している。これらの古代山城は規模や構造に統一性があり，立地にも共通性があることを指摘し，そこには律令国家による計画性を読みとることができるとした。関心が山へと拡張したようにもみえるが，古代山城の麓に展開した都市との関連がやはり意識されており，第４章へと展開してゆく。

第４章では，北部九州の筑前・筑後・壱岐・対馬の交通路と駅家について位置比定を試み，ついで大宰府条坊研究へと展開し，関心が国府や都城へと収斂することを予感させる。そして，大宰府研究の課題として，単に諸施設の復元に止まらず，周辺の山

城や水城，交通路さらに条里も含めて広域都市計画として把握する必要性を指摘している。

第5章では，大縮尺地形図や地籍図をもとに，1町方格の地割とその内部地割の検討，および発掘調査の成果から総合的に検討を加え，肥前と丹波の国府域とプランの復元を行っている。これら2つの章では，歴史地理学のオーソドックスな方法が採用されている。

第6章では，著者がもっとも関心を有していたという古代都市と城壁に焦点を絞り，東アジア全体を視野に収めて古代都市の囲郭を検討している。日本と中国の古代都市については，かなりの程度までその具体的プランが明らかになってきたのに比し，古代朝鮮の都市研究には未解明な部分が大きいとして，既往の研究を踏まえたうえで，問題点を探るとともに考古地理学的予察を加えている。さらに，中国・朝鮮・日本の間での比較研究の必要性についても示唆している。これを受けて，第7章へと展開する。

第7章では，冒頭に載せられた著者が東アジアの都城遺跡をめぐった時の印象記は，東アジアの都城について乏しいイメージしか持っていないわれわれには行き届いた配慮である。ついで本格的に104にも及ぶ都城の規模と形態に関する定量的データの整理を行い，整形度というアイディアによる検討を中心に，規模・方位・形態等の点から，それらの時代別・地域別検討を加えている。その結果，都城規模のランク差の存在や日本と新羅の都城が国力に比して大規模であること，藤原京と平安京の源流は区別すべきことなど興味深い指摘をしている。日本や新羅が分に過ぎた都城を建設したのは，第1ランクの都城を目標にしたことによると推定されているが，その背景や要因，また藤原京と平城京のモデルが異なることについても，今後さらに踏込んだ議論が期待される。

このほか前半の3つの章には短い付論が付されている。

以上，章毎に簡単に内容を紹介し，若干の感想を記したが，論文が書かれた当時のことからすれば，ないものねだりとの謗りは免れ難いかも知れない。

また，本書は400ページ近い大部な専門書であるが，巻末に18ページにもおよぶ詳細な人名・事項索引と地名索引が付されており，読者にとっては大変便利で，本書の利用価値を高めている。

このように本書は「日本古代都市研究」と題してはいるものの，著者はアジアもその視野に収めて，都市以前から，さらに都市周辺へも関心を注ぎ，また先端的分析手法により須恵器の産地分析を行う等，全篇にわたり真摯で意欲的な著者の姿勢が貫かれている。ただ，一書に纏められるに当たっては，著者なりの本書に通底する古代都市の定義を「序章」として加えていただければ，単に平野と山の対比というにとどまらず，なぜ弥生時代の集落も対象とするのかがより一層理解しやすくなったであろう。青森県の三内丸山遺跡の「縄文都市」はともかくとしても，「都市」の定義は難しいが，吉野ケ里遺跡の発見を待つまでもなく，弥生時代においても既に石器や青銅器の生産をはじめとして多様な機能を有した大規模な集落の出現をみている。なかには「都市」としか表現しようのない遺跡も見出され，さらには規模や中心性の階層差を見出すこともできるような，今日の弥生時代集落研究の状況からすると，古代都市の定義を試みることは，あながち無駄なことではないように思われるのであり，本書で弥生時代の集落立地をとりあげた先見性も明らかになるのではないだろうか。

ところで日本の古代都市に関しては，これまで多くの書物が刊行され，歴史地理学からの貢献も大である。しかし，考えてみると古代都市をメインテーマにした歴史地理学者による単著というと案外少ない。そのような意味において，本書の出版はまことに御同慶の至りであり，斯学への寄与・刺激も期待できるのではと思う。最後に，評者の勝手な解釈による誤解もあったのではとの危惧もあるが，上記のような思いからペンを執ったということで著者の御寛恕を乞いたい。

（出田和久）